

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：11201

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14159

研究課題名（和文）日常生活行動の発達における群生環境の時空間的制約と資源に関する生態学的検討

研究課題名（英文）Ecological Study of Spatiotemporal Constraints and Resources in Populated Environments for the Development of Daily Life Behaviors

研究代表者

青山 慶（Aoyama, Kei）

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：60736172

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、時空間的にオーバーラップする他者の日常生活行動が埋め込まれ構造化されている群生環境というパースペクティブから、子どもの日常生活行動の発達の制約と資源を実証的に解明することを目的とした。子どもの片づけ場面、家事の手伝い場面を分析した結果、（1）生活の場における片付けとは、片づけられる「もの」の色や形などの性質によって制約されるだけでなく、片づけられる場所の周囲で営まれる生活によっても制約されること、（2）子どもは日常生活行動の発達は、同じ生活場所を新たに探索することを通して新たにアフォーダンスを発見する過程を含むことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもたちは、他者とともに生活する場所で日常生活を送るための行動を身に付けていきます。例えば、リビングルームは、子どもたちの生活だけではなく、養育にかかわる大人の日常生活もできるように多かれ少なかれ整理されている必要があります。本研究では、子どもの日常生活行動の発達は、ただ日常生活のための行動が器用に上手くなるだけではなく、共に暮らす人々の事情も含みこむような条件下で、環境に支えられて生じている可能性が明らかになりました。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to empirically elucidate the developmental constraints and resources of children's daily life behaviors from the perspective of populated environments, where daily life behaviors of others, overlapping spatiotemporally, are embedded and structured. Analysis of children's tidying up scenes and helping with household chores revealed that: (1) tidying up in living spaces is not only constrained by the characteristics of the 'objects' being tidied up, such as their color and shape, but also by the daily activities conducted around the places where the tidying up occurs, and (2) the development of children's daily life behaviors involves discovering new affordances through the process of newly exploring the same living spaces.

研究分野：発達科学、認知科学

キーワード：アフォーダンス 発達システム 発達カスケード 社会的アフォーダンス エンカウンター 群生環境
日常生活行動 促進行為場

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日々の生活の中で行われている万人に共通する様々な動作を意味する日常生活動作 (Activities of daily living) と対比的に、社会生活を調和的に営みつつもその人らしい固有性を形作るような行動を総称して日常生活行動 (Daily life behavior) と呼ぶ。

いわゆるシステム論的転回を経て氏と育ち、成熟と学習、遺伝と環境という二分法的要因のどちらの重要性も認める 20 世紀末以降の行動発達研究においては、伝統的な神経学・運動学的な観点からの研究だけではなく、文化・歴史・状況を重視する観点からの研究も多く為されてきた。実際、食事や歩行などのような特定の日常生活動作の発達研究が、養育者の働きかけの重要性を示唆している。しかし、分析対象となる特定の日常生活動作場面に焦点を当てデータを蓄積するという方法論においては、養育者はまさに養育者として枠づけられることによって共に住まう生活者としての側面は剩余的な扱いとなり十分な焦点が当てられておらず、発達のシステム論的解明は未だ限定的であるといえる。

それに対して近年、動画、画像、音声などの記録技術や機材が飛躍的に小型化・安価化したことによって、発達研究の「ライフログ化」が進んでいる。これは特定の年齢段階の子どもや、特定の場所での活動を高密度で縦断的に記録し、発達過程を詳細に明らかにする動向である。ライフログデータは、人々の生活そのものを扱う可能性を開き、発達研究に生態学的知見をもたらしつつある。それにより子どもの個体能力の成長という観点だけではなく、それに伴う養育者やきょうだいを含む共同生活者の日常生活行動全体の発達の変遷を追うことが可能になりつつある。こうした観点は、必ずしも養育的なものとして明確ではないような発達環境の資源や制約の重要性に実証的なレベルで新たな光を当てつつあった。

以上より、時空間的にオーバーラップする他者の日常生活行動が埋め込まれ構造化されている群生環境というパースペクティブを分析枠組みに持ち込み、その発達の制約と資源を実証的に解明することは、今後の子ども環境学の新たな研究領域となっていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日常生活行動の発達を捉える枠組みに群生環境という概念を導入し、子どもを含む生活者が住環境において調和的かつ固有的に日常生活行動を獲得していく過程を明らかにすることであった。そのために本研究では、生活者個々人の日常生活行動に焦点を当てつつも、生活者らが相互に調整し合いながら利用する時間と空間を生態学的なレベルにおいて実証的に捉えることを重視した。こうした目的に対して以下の三つのレベルで検討を行った。

[1] ライフログデータベースの構築 本研究が第一に行うことは、群生環境における複数の生活者の日常生活行動の競合と調整の過程を含んだデータベースの構築であった。本研究の調査対象は、一般的に自立した座位が獲得され手による安定した操作が現れてくるより前の生後 3 ヶ月頃からとした。

[2] 発達を支える群生環境の制約と資源の解明 共同で居住する住宅や保育施設では時間も空間も無制限ではないため、各活動に合わせて家具や道具の配置換えや並び替えが適宜行われることによって活動のための「場所 (Place)」を作り出すことが通常である。それ故必ずしも最適化された環境だけで活動が生じるのではない。本研究では、一般的な住環境の記述である間取りと家具の分類と、パターン・ランゲージ (Alexander, 1977) という住環境の生態学的な分類法を用いて、群生環境の制約と資源を記述し分析することを目的とした。

[3] 総合的理解と応用のための事例集の作成 上記の分析をもとに、住宅メーカーや保育施設などに対して新たな環境デザインの示唆となるようなコンパクトな事例集を作成することを目的とした。

さらに、上記の実証的研究を、システム論的発達理論から理論的に検討することも本研究の目的の一つであった。

3. 研究の方法

本研究では、日本国内で育児を行っている複数家庭において、リビングルームでの日常生活場面を縦断的に複数のビデオカメラで記録し、分析を行った。分析の視点として、「片付け」と「手伝い」などのような日常生活行動と、それにも伴う物の配置換え、さらに活動が生じるリビングルーム内の場所に着目した (図 1)。



図 1: リビングルームの記録の例: リビングルーム内の移動経路とそれによって区切られる場所 (青山, 2021)

4. 研究成果

研究成果として、第一に、生活行動を通して発見する場所の意味の解明（青山，2021）があげられる。本研究では、時空間的にオーバーラップする他者の日常生活行動が埋め込まれ構造化されている群生環境というパースペクティブから、子どもの日常生活行動の発達の制約と資源を実証的に解明することを目的とした。その点において、子どもの片づけ場面、家事の手伝い場面を分析した結果、（1）生活の場における片付けとは、片づけられる「もの」の色や形などの性質によって制約されるだけでなく、片づけられる場所の周囲で営まれる生活によっても制約されること（図2）（2）子どもは日常生活行動の発達は、同じ生活場所を新たに探索することを通して新たにアフォーダンスを発見する過程を含むことが示唆された。上記の結果は、家族で住む住居のリビングルームでは、複数の年代の生活者がそれぞれに異なる生活行動を通して、同じ場所に異なる意味を発見していること、すなわち家族にとってのリビングルームの重層性を示唆するものであった。また、生活行動だけではなく、身体もまた場所の意味を発見するための重要な要因となっていることも確認された。



図2 ものの色や形だけでなく、食卓周辺という事情を含むレイアウトの例

第二の研究成果として、「発達の資源としてのバリアについての検討」（大崎・青山，2022）がある。本研究が着目する、制約と資源の表裏一体性について、心と身体、発達のリハビリテーション、精神病理学の領野にかかわりながら作品制作、研究活動を展開しているアーティストの大崎晴地氏にインタビューを行った。大崎氏の作品である、4層のシートが媒質を包み込むようレイアウトされている「エアトンネル」で起きることから、出会いと気配、遮蔽とフィクションなど今後の発達研究への示唆を得た。また、インタビューに先立って、2021年11月「エアトンネル」のを展示し、茨城県取手市の三宝グラウンド内倉庫にてエアトンネルの実体験する体験ワークショップを開催した（図3）。



図3 ワークショップの様子

第三の研究成果として、「社会的」アフォーダンスについての検討（南・大谷・青山，2023）がある。本研究では、組織開発を主事業とするベンチャー企業の現場から対話型のワークショップのファシリテーションの中で、参加者を取り巻く環境として、座の様式、レイアウト、間合いなどの「現場の生態学」と呼べる条件の提供が有効であることを論じ、これらを「社会的アフォーダンス」と呼べるのではないかという仮説を提起した。その一方で、生態心理学者、ギブソンの研究でこれまで注目されてこなかったアイデアとして「エンカウンター」論があることを取り上げ、そこでは「もの」ではなくイベント（出来事）の単位に着目し、特定のイベントへの接触や予期的な制御に着目する視点を検討した（図4）。そのうえで、社会的アフォーダンスは、イベントの持続を左右する場の条件であること、「わからなさ」という限界的な状況の「縁」で発生する可能性、さらに制度との関わりについて検討した。



図4 接触の多様化としての社会化

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 大崎 晴地、青山 慶	4. 巻 14
2. 論文標題 発達のリソースとしてのバリア：大崎晴地氏インタビュー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生態心理学研究	6. 最初と最後の頁 95～108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24807/jep.14.1_95	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西尾 千尋、青山 慶	4. 巻 15
2. 論文標題 子どもの描画行為における二重性知覚の発達：なぐりがきにおける調整行為からの検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 生態心理学研究	6. 最初と最後の頁 47～66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24807/jep.15.1_47	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 由紀、青山 慶、佐々木 正人	4. 巻 15
2. 論文標題 特集：アート/表現の二重性（duality）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 生態心理学研究	6. 最初と最後の頁 45～46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24807/jep.15.1_45	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西尾 千尋、青山 慶、山崎 寛恵	4. 巻 14
2. 論文標題 発達：持続と変化のイベント	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生態心理学研究	6. 最初と最後の頁 33～33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24807/jep.14.1_33	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 南 博文, 大谷 直紀, 青山 慶	4. 巻 1
2. 論文標題 これって「社会的」アフォーダンスなのか? -社会的な場が提供する行為の可能性-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 質的研究と社会実装	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計8件(うち招待講演 5件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 青山慶
2. 発表標題 もうひとつの経験論の系譜: 徹底した経験論(Radical Empiricism)の継承
3. 学会等名 日本発達心理学会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 青山慶
2. 発表標題 社会的なことの知覚と行動の場
3. 学会等名 日本発達心理学会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 青山慶
2. 発表標題 アフォーダンス: エンカウンターとその制御
3. 学会等名 日本認知科学会第38回大会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青山慶
2. 発表標題 「間合い」と「出会い」：行動はなにを制御しようとしているのか
3. 学会等名 日本認知科学会間合い研究会第20回研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青山慶
2. 発表標題 " Perception as Information Detection "：生態心理学の現在
3. 学会等名 日本生態心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青山慶
2. 発表標題 文化的実践における認知研究の相互理解に向けて-生態心理学の立場からの接近-
3. 学会等名 日本認知科学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 青山慶
2. 発表標題 初期コミュニケーション発達と関係する複数の物のレイアウトの分析
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青山慶
2. 発表標題 Gilbert Gottlieb の蓋然的後成説
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 是永論、富田晃夫、青山慶（他）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 172
3. 書名 エスノメソドロジー 住まいの中の小さな社会秩序 家庭における活動と学び	

1. 著者名 ティム・インゴルド、柴田 崇、野中 哲士、佐古 仁志、原島 大輔、青山 慶、柳澤 田実	4. 発行年 2021年
2. 出版社 左右社	5. 総ページ数 604
3. 書名 生きていること	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------